

新しい学力観—キー・コンピテンシー定義からの考察（１）—

工藤真由美*

New scholastic ability —A study on the Definition of Key Competencies

Mayumi Kudo

本稿はコンピテンシー概念、とりわけその中で重要な要素となるキー・コンピテンシーの定義について学び、そこから今日の社会の中でより豊かに生きる力、社会を豊かに形成していく力の育成に向けての端緒としての考察である。

DeSeCo によると、コンピテンシーの高い人の特性は、異文化での対人関係の感受性が優れ、他の人に対しての前向きな期待を抱いて他者の人間性を尊重し、人とのつながりを作るのがうまい。それをキー・コンピテンシーとしてまとめると①自律的に活動する力、②異質な集団で交流する力、③道具を相互作用的に用いる力、である。自律的に活動するには、大きな展望を持って行動することや、人生計画や個人的なプロジェクトを設計し実行することや、自らの権利や利益、限界、ニーズを守ったり主張する力が必要になる。また、異質な集団で交流するには、他者とうまく関わったり協力したり、対立を処理解決する力が必要である。道具を相互作用的に活用するには、言語、シンボル、テキストや知識や情報、技術を相互作用的に活用する力が必要である。

Key words: コンピテンシー、キー・コンピテンシー、OECD、DeSeCo、

はじめに

社会ではコンピテンシーという概念が少しずつ使われるようになり、文部科学省により、新しい学力観として従来からの学力からの脱却ということが言われるようになっていく。そのような中、次世代を育成する保育者を養成する高等教育機関はそれらをどのように受け止め、そこから何を学ぶべきか、本稿はその端緒としての考察である。

近年行われた OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) によると、「読解力、数学、科学領域での生徒の知識と技能の分析と評価から、人生における生徒の成功はいつそう広い範囲のコンピテンシーと呼ばれる能力に左右されるのではないかとということがわかってきた。それは、学習への意欲や関心から行動や行為に至るまでの広く深い能力観、コンピテンシー（人の根源的な特性）に基礎づけられた学習の力への大きな視点が必要になってきているという指摘である。個人の生涯にわたる根源的な学習力として、コンピテンシーという用

語が充てられ、それが学校家庭職場、地域日常生活の中で育成されその力によって人生の幸福や円滑な生活が得られるのではないかと提案されている。」⁽¹⁾

そのようなコンピテンシーの国際的な標準化を目指すプロジェクトの成果から引用しつつ、コンピテンシーの高等教育機関への適用を考えていきたい。そのために、まず本稿は『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』を中心に、この中でコンピテンシーについての分析やコンピテンシーについての提案がまとめられていく過程から、コンピテンシーの理解を深めることを目的とする。

第1章 DeSeCo プロジェクト

『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』の中で、「OECD(経済協力開発機構)をはじめとする多国籍機関は、教育分野の国際比較指標の開発に相当の努力を傾けてきた。一般にこうし

* 四條畷学園短期大学 保育学科

た指標は読解技能や数学的技能といった伝統的な学力や技能の発達概念を測定している。」⁽²⁾と述べられている。更に「これらのカリキュラムを基礎として、主題に関連付けられたコンピテンシーや基礎的な技能は、時に人間的発達や社会的発達、そして政治的経済的な活動にとって十分な程度の教育的な効果をもたらしてはいないということも認められてきた。読み、書き、計算することとは別に、どのような他の能力が個人を人生の成功や責任ある人生へと導き、社会を現在と未来の挑戦に対応できるように関連付けられるのか？各個人の基礎となる重要な能力の何組かのセットを定義し選択するための規範的、理論的、概念的な基礎は何か？こうした疑問への関心が、OECD 主導のもと、1997 年末から行われた国際的・学際的努力へと結びついた。このプロジェクトは DeSeCo (コンピテンシーの定義と選択：その論理的・概念的基礎、Definition & Selection of Competencies; Theoretical & Conceptual Foundations) と題され、スイス連邦主導によって実行されてきた。」⁽³⁾と紹介されている。

そして DeSeCo の目標は、「①生涯学習の視点至った個人の基礎となるコンピテンシーの発達。②国際的な環境におけるコンピテンシーの評価。③国際的に比較可能な指標の開発と分析。」であり「DeSeCo が焦点を当てるコンピテンシーは人生の成功や社会の良好な働きに貢献するものなのである。」と指摘している。⁽⁴⁾

では DeSeCo が焦点を当てたコンピテンシーとは何か。次にその点についてみていく。

第2章 コンピテンシーとは何か

『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』の中で、近年企業においては、仕事ができる人の特性を「コンピテンシーの高い人と呼び始めている。」⁽⁵⁾と紹介され、その特性として次の3つをあげている。

- (1) 異文化での対人関係の感受性が優れている。外国文化を持つ人々の発言や真意を聞き取り、その人たちの行動を考える。
- (2) 他の人たちに前向きな期待を抱く。他の人たちにも基本的な尊厳と価値を認め、人間性を尊重する。
- (3) 人とのつながりを作るのがうまい。人と人と

の影響関係をよく知り、行動する。⁽⁶⁾

そして、経済協力開発機構 (OECD) はこれまでの国際調査に用いられた研究課題と各国の教育政策を整理し、将来行われる国際調査に共通する能力の概念を一つにまとめる事業を提案した。この通称 DeSeCo プロジェクトでは成人の能力概念を整理し、新たな定義を行おうとした。その研究成果で特に重要な3つの鍵となる力がキー・コンピテンシーと呼ばれるようになった。それは

- (1) 自律的に活動する力
- (2) 異質な集団で交流する力
- (3) 道具を相互作用的に用いる力⁽⁷⁾

である。次章ではこのキー・コンピテンシーの特徴についてみていく。

第3章 キー・コンピテンシーについて

前章で取り上げた「コンピテンシーの定義と選択：その論理的、概念的基礎」プロジェクト (通称 DeSeCo) で行われた成人の能力概念において重要な3点について、これらキー・コンピテンシーの3つのカテゴリーそれぞれの重要な特徴は、以下のようにまとめ紹介されている。

(1) 自律的に活動すること

キー・コンピテンシーの一番目に挙げられた自律的に活動することとは「社会に異質な集団の中で交流することや自律的に活動することは、同じコインの表裏として互いに補完し合う関係で理解しなければならない。自律性は集団的生き残りの手段であり、公平な協力への鍵である」⁽⁸⁾とされている。更に、「自律的に活動することは、社会空間を乗り切り、生活や労働の条件をコントロールしながら自らの生活を有意義で責任ある形で管理するように個人がエンパワーされていることを意味する。したがって自律的活動とは、だれかに働きかけられるのではなく、自ら行動することであり、誰かに形作られるのではなく、自ら形成することであり、他者が決めたことを受け入れるのではなく、自ら選択することである。自律的活動は社会の発展、およびその社会的、政治的、経済的機関に有能に参加することであり、(たとえば、意志決定のプロセスに参加すること)、生活の異なった領域 (職場、個人としての生活や家庭生活、市民的・政治的生活) において有能さを発揮

することである」⁽⁹⁾とも述べられている。

このカテゴリにおいて責任と思慮深さをもって自律的に活動することにかかわるコンピテンシーは3つある。それは、以下の3つである。

1) 大きな展望、あるいは文脈の中で行動すること

この能力は『『大きな展望』つまり、行動や決定の大きな規範的、社会経済的、歴史的な文脈またその文脈がいかに機能するのか、その中における自らの立場は何か、問題となっている事柄、自らの行動が導く長期的で間接的な影響、さらにこれらの要因を行動する際に考慮すること、等々を理解したり、検討したりすることにかかわる。この考えは『グローバルに考え、ローカルに行動する』というスローガンにある程度表現されている。大きな展望の中で行動することは、個人がその行動やふるまいにおいて一貫性を育て、築き、維持することを必要とした、可能にする。』⁽¹⁰⁾ものである。

更にこの能力は「個人が問題となっている事柄をグローバルなレベルで理解し、また自らの役割と行動の結果をより広い文脈で（歴史的、文化的、あるいは環境的に）理解できるようにし」「社会においては、個人が公正で責任あるやり方で行動することを確実にするのを助ける」⁽¹¹⁾ものであるとされている。

2) 人生計画と個人的なプロジェクトを設計し、実行する力

この力に関しては「特定のプロジェクトや計画に焦点を当てる際に重要なのは、それらが他と無関係に存在しているのではないと認識することである。私たちのアイデンティティやセルフ・エスティーム（自尊感情）の意識は、生活の中で経験し作り出す継続性に基づいている。私たちは人生を、それに意味と目的を与える構成された物語（ナラティブ）としてとらえる必要がある。このことは人生が破壊され分断されたりするなど変化する環境において、また伝統や絶対的な道徳的枠組みが影響力をかなり失った現代社会において特にあてはまる。その結果、個人は自らの個人的なプロジェクトや目標のために計画を立てるだけでなく、その計画が自らの人生において意味を持ち、またより大きな人生計画と一致するようにする必要がある」⁽¹²⁾と位置付けられ、「人生計画や個人的なプロジェクトを作る能力には、未来志向であること、つまり楽観主義と潜在的可能性が前提となる。同時に、可能な領域の範囲内でしっかりとした足場をもつ必要があり、それはアクセスできる資源や必要な資源（たとえば時間、お金、その他の資源）を見つけ出し、評価すること、そしてプロジェクトを実現するための適切な手段を選択することなどである。目標に優先順位をつけ、その意味をさらに明確にしたり、効率的、効果的なやりかたで自らの資源を使ったりすることを含意する。言い換えれば、多重のニーズ、目標、責任に応えるために自らの資源のバランスをとるということである。プロジェクトや人生計画を確立するためには、過去の行いから学び、将来の結果を考慮することが必要となる。未来志向は当然のことながら過去の行動や経験に立脚していなければならない。いったんプロジェクトや戦略が作られれば、そのプロジェクトの進捗をモニターし、必要な場合は調整し、その効果を評価することが重要な取り組みとなる」⁽¹³⁾とされている。

ある」⁽¹²⁾と位置付けられ、「人生計画や個人的なプロジェクトを作る能力には、未来志向であること、つまり楽観主義と潜在的可能性が前提となる。同時に、可能な領域の範囲内でしっかりとした足場をもつ必要があり、それはアクセスできる資源や必要な資源（たとえば時間、お金、その他の資源）を見つけ出し、評価すること、そしてプロジェクトを実現するための適切な手段を選択することなどである。目標に優先順位をつけ、その意味をさらに明確にしたり、効率的、効果的なやりかたで自らの資源を使ったりすることを含意する。言い換えれば、多重のニーズ、目標、責任に応えるために自らの資源のバランスをとるということである。プロジェクトや人生計画を確立するためには、過去の行いから学び、将来の結果を考慮することが必要となる。未来志向は当然のことながら過去の行動や経験に立脚していなければならない。いったんプロジェクトや戦略が作られれば、そのプロジェクトの進捗をモニターし、必要な場合は調整し、その効果を評価することが重要な取り組みとなる」⁽¹³⁾とされている。

3) 自らの権利、利益、限界、ニーズを守り、主張する力

この能力は「高度に構造化された法的問題からアサーティブネス（上手な自己主張）を必要とする日常的な事柄に至るまでのさまざまな状況に関連している。」⁽¹⁴⁾とされ、この能力の発達により、「個人は個人的な権利及び集団的な権利を主張し、尊厳ある存在を保障され、自らの人生に対してより大きなコントロールができるようにエンパワーされ」「個人は有能に自らを主体として確立し、市民として、家族の一員として、消費者として、また労働者としてその責任や選択を熟練した形で担うことができる」⁽¹⁵⁾とされている。

(2) 異質な集団での交流

キー・コンピテンシーの二つ目に挙げられた、異質な集団での交流については、今日関係性の崩壊や社会の多様性の中で「個人が多様な背景を持った人々で構成される集団や社会秩序に加わり、その中でうまく機能し差異や矛盾に対処する必要」⁽¹⁶⁾に迫られる中で重要な能力と位置付けられる。このカテゴリの中の能力は、個人が学習し、生活し、

他者とともに取り組むために必要である。このカテゴリーの鍵となるのが次にあげる3つの力、キー能力である。

1) 他者とうまくかかわる力

他者とうまくかかわるためには、いくつかの前提条件があるとされる。まず「共感是他者の役割にとって代わったり、その人の視点に立って状況を想像したり、その人が感じていることを感じたりすることであり、おそらくもっとも重要なものである。共感とは、多くの意見や信念を考慮する時、ある状況において当たり前と考えていたことが必ずしも他者と共有されていないことに気付くという意味で、自分自身の振り返りにつながる。」⁽¹⁷⁾ さらに、他者とうまく関わることのもう一つの重要な側面は、「自らの感情や内面の気分に対処することである。この能力は自己認識、および自分自身や他者の根底にある情意や動機の効果的解釈を前提としている」⁽¹⁸⁾ のである。

2) 協力する力

これは、「共通の目的に向かって他者と協力し、一緒に仕事をする能力」⁽¹⁹⁾ であり、それは「集団全体として必要とされる能力ではなく、集団の個々の成員が必要とする能力である。協力には集団とその規範へのコミットメントと自律的な活動の間でバランスをとること、および集団に能動的に参加する責任とリーダーの役割を共有し、他者を支援する必要との間でバランスをとることが含まれている。」⁽²⁰⁾ という。この能力の重要な要素とされるのは、「まず自らの考えを提示し、他者の考えに耳を傾けること、枠組みを切り替えて異なる視点から問題に接近すること、他者の役割や責任及び全体の目標との関係で、自らの具体的な役割や責任を理解すること、そして自らの自由を制限してより大きな集団に調和することである。」⁽²¹⁾ そして、「協力的な振る舞いにいったん関与すれば、議論の力学や議題、およびそこに存在する傾向を理解すること、連帯の限界を探知し、戦術的あるいは持続可能な提携を構築すること、そして対立する利害の間で妥協をはかることなどが中心に位置づく。最後にこの能力は、交渉し合意を築くこと、そして異なった色合いの意見を許容する決定を行うことを伴っている」⁽²²⁾ とされている。

3) 対立を処理し、解決する力

この第三の能力は「対立を処理し、解決し、対立する利害を調整し、または許容する解決策をみつけ出す能力」⁽²³⁾ とされている。「対立は社会的現実の一部であり、人間関係に内在するものであり、自由と多元主義の見返りとして存在している。対立に前向きに接近する鍵はそれに対処すべきプロセスと見なし、したがって全面的に避けようとか、排除したりしようとせず、賢明で、公正で、効率的なやり方で対処すること」⁽²⁴⁾ が大切である。

(3) 道具を相互作用的に活用すること

キー・コンピテンシーの三つ目にあげられた、道具を相互作用的に活用することとは、「道具」という言葉をもっとも広い意味で使っており、モノとしての道具も社会・文化的なツールとしての道具も含んでいる。この場合、「道具を相互作用的に用いるうえで『相互作用的』という副詞に意味がある」⁽²⁵⁾ のである。それは「個人が知識やスキルを作り出し、採用することが期待されている世界において、道具を使う技術的なスキルを持っている（たとえば、文書を読む、コンピュータ・マウスを使うなど）だけではもはや十分ではない。道具を相互作用的に使うためには、道具そのものになじんでいることや道具が世界との相互作用のやり方をどのように変化させ、また道具を使ってより大きな目標をどのように達成するのかについての理解が前提となる」⁽²⁶⁾ のである。この場合「『道具』は単なる受け身の媒介物ではなく、『個人と環境の間の能動的な対話』に欠かせない部分であり、」「文字通り人間の心身を拡張したもの」⁽²⁷⁾ となる。人は「道具を通じて社会と出会うという考え方が底流にある。これらの出会いが世界を意味づけ、世界との相互作用における有能さを作りだし、変化への対処や新たな長期的課題にどのように対応するかを形作る」⁽²⁸⁾ のである。したがって、「道具の相互作用的活用とは、道具とその活用に必要な技術的スキルをもつだけでなく、道具の活用を通じて確立される新しい形の相互作用を認識し、日常生活において自らの振る舞いをそれにしたがって適合させる能力」⁽²⁹⁾ ということを含んでいるとされるのである。このカテゴリーには次の3つの能力が関連している。

1) 言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する力

この力においては、「言語スキル（話し言葉、書き言葉の両方）や計算その他の数学的スキル（たとえば、グラフ、表、さまざまな形のシンボルなど）をさまざまな状況（たとえば、家族、職場、市民生活）において効果的に活用すること」⁽³⁰⁾が重要であるとされ、これらは「社会や職場でうまく機能し、個人的、社会的な対話に効果的に参加するために欠かせない道具である。この能力は『コミュニケーション能力』あるいは『リテラシー』」⁽³¹⁾と呼ばれているものである。

2) 知識や情報を相互作用的に活用する力

サービスや情報セクターが世界経済において果たす役割がますます高まることにより、知識や情報の能力がキー能力として位置付けられる。そのため「人生のあらゆる分野でうまくやっていくために、個人は知識や情報にアクセスするだけでなく、それらを効果的に思慮深く、責任を持って活用する必要がある。」⁽³²⁾とされる。

このキー能力は「他者に依存することなく、情報や知識を自律的にみつけ、その意味を理解する力に関係している。知識や情報を相互作用的に活用することは、まだ知られていないことを認識して明らかにすることに始まり、適切な情報源を見出し、特定し、そこにアクセスすること（サイバースペースにおいて情報や知識を組み立てることを含む）に至る一連の行動や傾向を含意する。情報源が特定され、情報が得られれば、その情報源とともに情報の質、適切さ、価値を批判的に評価する必要がある。知識を組織化し（自らの知識ベースに選択された情報を組み込む）、賢明な決定を行ったり、一貫した行動をとったりするために情報を効果的に活用し、情報活用を取り巻く経済的、法的、社会的、倫理的な諸問題がある程度まで理解することは、この能力に関係した他の要件である。」⁽³³⁾とされる。

3) 技術を相互作用的に活用する力

知識・情報社会においてこの能力は「情報、コミュニケーション、およびコンピュータ技術に関係している。技術能力は技術の習熟以上のものを含んでいる」⁽³⁴⁾とされる。「技術が人々の働き方(ど

こに所在しているかということの重要性の減少により)、情報へのアクセスの仕方(広範な情報源へのアクセス速度の向上、および大量の情報をすばやく分類する手段の提供により)、他者との関わり方(電子手段を使って定期的に意思疎通する世界中の人々によって構成される「仮想」コミュニティの形成の促進により)を変容させる可能性を持っている。」⁽³⁵⁾しかしながら、「個人がそのような変容の本質を予測することを期待することはもちろんできない」⁽³⁶⁾が、この能力は「そのような事態の推移に思慮深く対応するための技術的な能力の一部である」⁽³⁷⁾とされる。「技術の可能性を理解することは技術を相互作用的に活用する、より一般的な別のプロセスにおいて不可欠である。したがって、技術に習熟する以上に重要なのは、異なった技術の目的や機能を全般的に理解することであり、その可能性を構想する能力である」⁽³⁸⁾と指摘される。

結び

以上、『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』に従い、人がより豊かに生きるためのコンピテンシーとその中でも特に重要なキー・コンピテンシーについてみてきた。従来日本の教育の多くの姿であった、記憶量の過多、理解の深淺からの学力のとらえ方からの脱却を図り、活用型の学力や根拠に基づく学習、対話型学習の重要性が認識され、それらは今日の新しい学習指導要領でも示されている。

人が学ぶ力は日常生活の習慣や人間関係によって育まれる。またその学ぶ力によって、自分の生活や人間関係、家族や職場、地域社会を育んでいるともいえる。

ゆえに学ぶ力は人生における根源的なものであり、その力の育成こそが、より良い人生、社会の形成につながっていく。

今回の DeSeCo によるコンピテンシー、キー・コンピテンシーの定義から、今後その学ぶ力としてのキー・コンピテンシーをどのように形成していけばいいのかなどについて検討を重ねていきたい。

注

(1)『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』
ドミニク・S・ライチェン、ローラン・H・サルガニク編著
立田慶裕監訳 明石書店 2006年 P9

- (2) 同上 p 2 4
- (3) 同上 p 2 5
- (4) 同上 p 2 5
- (5) 同上 p 8
- (6) 同上 p 8
- (7) 同上 p 1 0
- (8) 同上 p 1 0 9
- (9) 同上 p 1 1 0
- (10) 同上 p 1 1 2
- (11) 同上 p 1 1 2
- (12) 同上 p 1 1 3
- (13) 同上 p 1 1 3
- (14) 同上 p 1 1 5
- (15) 同上 p 1 1 6
- (16) 同上 p 1 0 6
- (17) 同上 p 1 0 8
- (18) 同上 p 1 0 8
- (19) 同上 p 1 0 8
- (20) 同上 p 1 0 8
- (21) 同上 p 1 0 8
- (22) 同上 p 1 0 8
- (23) 同上 p 1 0 9
- (24) 同上 p 1 0 9
- (25) 同上 p 1 1 6
- (26) 同上 p 1 1 6
- (27) 同上 p 1 1 6
- (28) 同上 p 1 1 6
- (29) 同上 p 1 1 7
- (30) 同上 p 1 1 7
- (31) 同上 p 1 1 7
- (32) 同上 p 1 1 8
- (33) 同上 p 1 1 9
- (34) 同上 p 1 1 9
- (35) 同上 p 1 2 0
- (36) 同上 p 1 2 0
- (37) 同上 p 1 2 1
- (38) 同上 p 1 2 1

－ 2011. 3. 30 受稿、2011. 3. 31 受理－